

ナ  
シ  
ョ  
ナ  
リ  
ズ  
ム  
の  
根  
拠  
—  
福  
沢  
諭  
吉  
の  
場  
合

平  
山  
  
洋

## ナシヨナリズムの根拠 ― 福沢諭吉の場合

平 山 洋

### 一 福沢は何かを隠している

#### 毀誉褒貶の『福翁自伝』

慶應三（一八六七）年一〇月の大政奉還までの福沢の前半生を知るための手掛かりは、わずかに残されている書簡を除けば、現在では『福翁自伝』だけが、ほとんど唯一の資料となっている。その理由は自伝の中にも記されているように、中津藩から幕府に出向していた元治元（一八六四）年一〇月に、長州藩との内通を疑われた旗本脇屋卯三郎が処刑された事件に関連して、内通の証拠となりそうな書類を福沢本人が焼き捨てたことによる。安政五（一八五八）年一〇月に始まる福沢の江戸での生活については、書簡・著作・翻訳によって伺い知れるだけである。

それより前の中津・長崎・大阪時代のこととなると、も

はや自伝を手がかりにして推測する以外になくなる。福沢の確認できる最初の肉筆は安政二（一八五五）年三月に塾に入門した際に入門帳に記した姓名が最初で、それ以前のいかなる肉筆も残されていない。これは不自然なことがある。というのは、父百助や兄三之助の文書は残存している（中津の福沢家は火災にあったことがない）のに、諭吉のもののみないことになるからである。

また、長崎に旅立って以降、諭吉が母順に送った手紙もないというのは、自慢の息子の手紙を廃棄するはずはないので、後年諭吉本人が捨てたと考えるのが適当である。なぜ捨てたのか。それはおそらく、自伝に述べてある中津時代の思い出が事実とは異なっていることを、福沢自身が自覚していたからである。

自伝については、時事新報連載中から、じつに面白いと

いう賞賛とともに、文中で悪く書かれている人々を中心に、不快感が表明されていた。元幕臣で新政府にも重用された勝海舟・榎本武揚を初め、維新後は鉄道建設や初等教育に携わった小野友五郎らがその主だった人々であるが、自伝中で福沢暗殺を企てた中津の壮士として、実名は挙げられていないものの強く批判されていた渡辺重石丸もその一人である。

### 渡辺重石丸とは誰か

渡辺家は代々古表神社の神職で、自宅（道生館）は福沢家の南百メートルのところにあった。重石丸の叔母は増田久行に嫁いでいて、その子が増田宋太郎だから、重石丸と宋太郎は従兄弟である。また、宋太郎の父久行は諭吉の母親の従兄弟で、宋太郎と諭吉は又従兄弟である。つまり、諭吉を暗殺しようとした一味（この二人にさらに水島六兵衛（妹が宋太郎の妻となる）と朝吹英二が加わるが、それは後に述べる）は、もともと親戚のうえ隣近所に住んでいた人々だったのである。

この渡辺重石丸が残した貴重な記録が『鶯栖園遺稿』（未刊行・註一）で、随所に『福翁自伝』への反論とおぼしき記述がある。その要点は、（1）自伝では不仲のように書いている家老奥平壱岐とは実は親密だった、（2）奥平壱岐・今泉郡司（当時奥平姓）・服部五郎兵衛・小幡孫三郎ら藩の若手幹部はもとより、福沢兄弟・大橋六助・水島六兵衛・

渡辺重石丸ら下士や神職の子弟も野本真城の弟子なのに、自伝で真城に一言も触れていない、（3）真城の学風は算術の重視（師匠帆足万里）と尊王思想（師匠頼山陽）だったが、自伝では間接的に前者には触れているものの、主に下士の間に広まっていた尊王思想について無視している、というのである。

諭吉より一歳年少の重石丸はあるいは知らなかったのかもしれないが、福沢兄弟の父百助と真城は幼少時以来の親友で、青春時代には一緒に上方旅行をして頼山陽を訪ねているほどである。兄三之助は藩校で真城の助手となっていて、それならなおさら触れないのは不自然である。諭吉が真城について書かなかったのは、重石丸が指摘している（3）について扱いたくなかったためと思われる。

## 二 中津藩改革党と天保の改革

### 中津藩天保の改革

諭吉が生まれる直前の天保五（一八三四）年夏、中津藩大阪蔵屋敷廻米方福沢百助は、加島屋からの緊急融資に成功したことによって、藩財政を破綻から救っている。この時の藩主は中津奥平家一代の昌猷であったが、前年家督を相続したばかりの弱冠二一歳ということもあり、実権はその父奥平昌高（五三歳・島津重豪の次男でシーボルトの

友人)が握っていた。

危機は乗り越えたものの藩財政再建は喫緊の課題であるため、天保六(一八三五)年に藩は足輕出身の黒沢庄右衛門を登用して、専売の強化・年貢の増徴そして家臣の半知借上(所得半減措置)を行なおうとした。当然藩の重役・高禄取を中心に批判が相次いだ、その反対を押し切って改革を実行しようとしたのが、家老奥平与兵衛(老岐の父)を首魁とし、藩儒野本真城を知恵袋に、また小幡篤蔵(篤次郎父)・島津祐太郎・天能三蔵ら中堅上士層を実働員とした勢力であった。この勢力を改革党と名づける。

結論だけを言うなら、この中津藩天保改革は、七年後の天保一三(一八四二)年に重役を中心とする保守党によって潰され、黒沢・野本・小幡らは隠居させられてしまうが、時代の趨勢は彼らを見放してはいなかった。すなわち弘化三(一八四六)年夏のビッドル来航は幕府に防衛力の強化を促して、改革党の運動を後押ししたのである。それは後に述べる。

挫折してしまったものの、中津藩天保改革は、それに先行する水戸藩と薩摩藩の改革の影響下にあった。というのも、藩政改革としての天保の改革は天保三(一八三二)年の水戸藩に始まるが、この時の水戸藩主徳川斉昭と先代中津藩主奥平昌高は、水戸徳川家分家の常陸府中藩松平家を介して姻戚関係(第九代松平頼繩の正室が昌高の娘)にあり、緊密に情報交換をしていたからである。また、薩摩藩

との関係については、島津家から奥平家に養子で入った昌高は、薩摩藩主斉興の叔父として、譜代・外様、中藩・大藩の枠を超えた交際があった。水戸藩における藤田東湖(天保元年郡奉行)、薩摩藩における調所広郷(天保三年家老格)、そして中津藩における黒沢庄右衛門(天保六年勘定方元締)の登用には連動性があった。

#### 英雄水戸中納言徳川斉昭

水戸藩の改革が成功を収めつつあるのを見て取った老中水野忠邦は、天保一二(一八四一)年に幕府でも改革を開始する。水戸藩で行われた海防城の設営に習い、防衛拠点としての江戸城・大阪城を中心に一〇里四方を上知(幕府直轄領)とする策を強行しようとしたところ、国替えを強いられる大名たちの激しい反発に遭って、弘化二(一八四五)年に失脚させられてしまった。

これより先、弘化元(一八四四)年に、徳川斉昭は無許可軍事演習を咎められて、藩主の座を長男慶篤に譲らされた。一二歳の慶篤の後見人になったのが松平頼繩で、頼繩は奥平昌高の娘婿であるから、水戸藩の内情は中津藩に筒抜けとなった。

『福翁自伝』には、中津の福沢家に集まった兄の友人たちが、江戸で見込みのある政治家たちを評する場面があるが、そこで彼らが崇めていたのが、徳川斉昭・松平春嶽(福井藩主)・江川英竜(関東総代官)の三人であったこと

が思い出される。春嶽と英竜はいずれも海防を重視する斉昭派ともいえるべき人々で、自分たちが管轄する長い海岸線をどのように防衛するかについて、早くから共同で研究を進めていた。

自伝に描かれている酒宴の開催時期を確定するのは難しいが、江川英竜は冬でも薄着だということを噂しているので、天保一三（一八四二）年の冬に英竜の伊豆葦山陣屋まで押しかけて砲術を習得した佐久間象山から聞いた話かもしれない。江戸で開塾していた象山は、嘉永三（一八五〇）年から六年まで中津藩の軍事顧問になっていて、弟子は中津藩邸だけで百名ほどもいた。江戸から戻ったそのうちの誰かが福沢家で話したのだと思う。

### 三 福沢のナショナリズムの原型としての水戸学

#### 師野本真城の『海防論』

自伝には中津での漢学の師匠として白石照山が主に挙げられているが、照山の師がまた野本真城であったことはどこにも書いていない。書いてあるのは照山が頼山陽の『日本外史』を批判したことで、この部分を読んだ渡辺重石丸は、山陽面授の弟子で自ら外史の仕上げを手伝った真城への面当てと受け取ったはずである。

重石丸は『鶯栖園遺稿』の中に、中津の若者の間で照山

の評価は決して高くなかったこと、弘化四（一八四七）・嘉永元（一八四八）年の両年に真城が開いていた秣村（中津から南に一〇キロ）の寺子屋が閉じられてより遠方に移転したため、諭吉がやむなく近所の照山塾に入門したことを記している。

実際中津の青年層への真城の影響力は絶大だった。その学風は、気概としての尊王攘夷、内実としての数学・経済学・物理化学の重視というべきもので、まずは日本を守るためにはどうすればよいか、という問題意識があった。『野本白岩遺芳』（二九三年刊）によれば、日本の先人として真城が尊敬していたのは北条時宗と楠正成で、塾でも彼らについての作文が課題として出されたと推測できる。また、現世におけるこの二人の再来が徳川斉昭で、後に述べるが、嘉永四（一八五一）年には自らが執筆した『海防論』を携えて江戸に行き、謹慎中の斉昭に面会を求めている。

天保一三（一八四二）年に中津藩改革党による藩政改革が失敗してから、天保一五年には徳川斉昭の隠居、そして弘化二（一八四五）年にはその斉昭を処罰した水野忠邦まで退陣と、幕府諸藩の天保の改革は相次いで挫折したが、国際情勢は日本に安閑とするのを許さなかった。弘化三年夏のビッドル来航は、嘉永六（一八五三）年のペリー来航とは違い民衆の目に触れなかった。そのため幕府は一見泰然としているかにもみえたが、中は大きく動揺していたのである。

## 老中阿部正弘、徳川斉昭に支援を求める

アヘン戦争で清国が英国に敗北したのは四年前のことで、次は日本か、と内心怯えていた。そこで水野の失脚により若くして老中首座となった阿部正弘は、謹慎中の斉昭に密かに協力を打診、以後二人は書簡により意見交換を開始した。それらの書簡は、『新伊勢物語』という書簡集に纏められている。

米軍艦が来た以上、もうなりふり構ってはいられない。阿部老中は海防掛（国防大臣）を兼務したものの、配下に適切な人材がいなかったため、国防の方策は謹慎中の斉昭に丸投げされることになった。結果として前々から水戸藩が申請していた大型砲艦建造の研究が認められたうえ、嘉永二（一八四九）年一月には、諸藩で海防を嚴重にするべしとの通達が出された。

その翌嘉永三（一八五〇）年二月に海防通達施行細則ともいふべき文章（「伊勢守口達覚」）が諸藩に送られ、各城下の札場に掲示されたのだが、これがなかなかの名文である。『扇城遺聞』（一九三二年刊）には、中津城前に掲示されたその原文が掲載されている。

日本国中にある所、貴賤上下となく、万一夷賊共御国威をも蔑にしたる不敬不法之働き等あらば、誰かは是を憤らざらん。然らば則ち日本全国之力を以て相拒み候趣意なり。被相弁候はば、諸侯は藩屏之任を不忘、

御旗本之諸士御家人等は御膝元に御奉公を心掛、百姓は百姓丈、町人丈、銘々持寄り、当然之筋を以て力を尽し、其筋々之御奉公致候義、是二百年來昇平之沢に浴し候御国恩を報ずる義と、厚く心懸候得者、即総国之力を盡し候趣意に当り候間、沿海之儀は相互に一和之力を被申候。（「伊勢守口達覚」部分・『扇城遺聞』一七二頁）

おそらくはこの細則を目にしたのをきっかけとして、真城は論文『海防論』を執筆、翌嘉永四（一八五一）年二月に江戸に赴いて斉昭に面会を求めた。その内容は、真城の師でもある帆足万里を登用して西洋式軍艦を建造して国防を強化し、将来は西洋諸国と覇を競うべきだ、というものであった。「伊勢守口達覚」とは阿部正弘の訓令を書写したということだから、真城が斉昭と会おうとするのは少しおかしいのだが、それくらい「海防ならば斉昭」という印象が、当時の日本にはあったということであろう。

細則の文体も水戸調とでもいふべき扇情的なもので、人を鼓舞する調子がある。起草者が誰であるかはこれだけでは分からない。会沢正志斎（六八歳）の文にも藤田東湖（四四歳）の文にも似ているといえは似ている。そればかりではない。私には、「道のためには英吉利、亜米利加の軍艦をも恐れず、国の恥辱とありては、日本国中の人民一人も残らず命を棄て、国の威光を落さざるこそ、一国の自由独



立と申すべきなり」という『学問のすすめ』初編（一八七二年刊）の一節にまで通底しているように思われる。

先にも触れたように、中津藩は海防通達公布直後の嘉永三（一八五〇）年に象山を軍事顧問に迎えて西洋式砲術の訓練を始めていて、真城の江戸行もその動きと連動している。諭吉の周辺がにわかに騒がしくなったのはこの時以降で、一旦は勢力を衰えさせていた中津藩改革党は、その目的を財政再建から軍事力増強に替えて、再興されることになったのである。非常時には下の階層の発言力が強まるものだが、幕末においては、その始まりは通常誤解されがちなペリー来航の年嘉永六年ではなく、嘉永三年だったのである。

#### 四 真の愛国とは何か―実学派と尊王派の抗争

##### 中津藩改革党の指導者奥平壹岐

斉昭との面会が果たせぬまま豊前白岩村（中津南東三〇キロ）に帰った真城が死去したのは嘉永七（一八五五）年のことである。この時点では真城門下生は一丸となって藩兵の近代化に邁進していたため、改革党内の派閥抗争はなかったようだ。安政五（一八五八）年の条約勅許問題と將軍継嗣問題も、改革党の立場は一橋派諸大名と同様であった。ただし中津藩士が何らかの策謀に同調していた気配は

ない。

中津藩で改革党を指導していた奥平壹岐が江戸家老に就任したのは安政五年春のことで、壹岐はさっそく大阪の適塾でオランダ語と砲術の修業をしていた諭吉を招いて邸内に塾を開かせた。慶應義塾の濫觴である。それまで藩兵を指導していた佐久間象山は嘉永七（一八五四）年に吉田松陰密航未遂事件に連座して信州の国元で謹慎となっていて、砲術訓練は象山の高弟島津文三郎（後に福沢夫妻の媒酌人）に任せた。また幕府立長崎海軍伝習所には浜野覺蔵（定四郎慶應初代塾長の父）が入学している。

改革党内で意見に相違が出てきたのは、井伊直弼が暗殺され、徳川斉昭も死去した万延元（一八六〇）年より後、幕府内で一橋派が復権しつつあるときだった。これは中津藩に限らず、水戸藩・長州藩・薩摩藩でも見られた現象だが、もとはといえば斉昭の次男慶喜の將軍就任を目指していた一橋派のうち、幕府の枠内でも発言が確保できる上層と、それではもとの軽輩のままになってしまいう下層に利害の不一致が出てきたのである。文久二（一八六二）年以降上層が公武合体派（実学派）となり、下層が尊王攘夷派となった。

中津藩で改革党が主導権を握って後、奥平壹岐・今泉郡司・服部五郎兵衛・福沢諭吉ら実学派（主流派）の増長に「面白くない」という思いを抱いていたのが、主に国元にいた下士身分の尊王派だった。文久三年三月、水島六兵衛・

岡本小弥太・浅沼総之助ら下士一五名が連署して、江戸家老奥平壹岐の罷免を城代家老に要求した。理由は、壹岐が第一二代藩主昌服の養子に宇和島藩主伊達宗城（公武合体派の大物）の息子を入れることで、藩政を牛耳ろうとしている、というのである。その顛末は、五月に壹岐の家老引退、水島らの減祿の裁定が下されて痛み分けとなり、文久二（一八六二）年六月に長州藩で起こったような藩内クーデターは不成功に終わった。水島らの期待も空しく家老職は保守党の手に帰して、以後中津藩政はますます幕府に從属となった。

福沢諭吉は非愛国者で尊王心のかけらもない、という風聞を世間にまき散らしたのは、水島ら壹岐を失脚させた尊王派の人々である。諭吉本人としては、真城の、また斉昭の教えを忠実に守って国防力を増強しようとしている自分たちの愛国心を疑われる筋合いはない、それに文久二年以降は斉昭の遺児慶喜が幕府の指導をしているのだから、幕府に従うことは同時に尊王ともなるはずだ、と反論したいところであろう。

### 徳川慶喜の家来としての福沢諭吉

諭吉の身分は、万延元（一八六〇）年一月に中津藩士のまま外国方に採用、元治元（一八六四）年一〇月に幕府直参旗本となり、慶應二（一八六六）年七月の慶喜の徳川本家相続によって正式に彼の家来となった。慶喜の父斉昭

の主義は尊王敬幕といって、両者をとともども奉るという立場だった。その考えは水戸弘道館の学者たち、石河明善（幹明の叔父）や原市之進（藤田東湖の従弟）に引き継がれ、幕末の江戸にも広まっていた。文久三（一八六三）年に一橋家に移籍し慶喜の側近となった原と諭吉とは交流があったはずだが、諭吉は自伝でそのことに一言も触れていない。ただ、「大君のモナルキ」について述べた書簡（慶應二年一〇月）からは、諭吉が慶喜側近（元水戸藩書生党员）と似た考えをもっていたことがうかがわれる。（註二）

一方真城亡き後の中津藩改革尊王派はどうかといえば、心情的には長州藩正義党（高杉晋作ら）や水戸藩天狗党（藤田小四郎ら）に近い、幕府を乗り越えての新たな政権樹立に期待を抱いていたのだった。彼らは渡辺重石丸のもとで主に国学を学び、その周辺により若い増田宋太郎や朝吹英二ら加わることになった。壹岐の追放後、彼らは諭吉の命を狙っていたのである。

自伝には「暗殺の心配」という章がわざわざ設けてあって、諭吉がどのように命を狙われたかが書いてある。そのうち維新後の東京で発覚した計画は、『学問のすすめ』と『文明論之概略』に関する誹謗がもとで、首謀者は中津藩関係者ではない。その章の大部分を占める維新後の明治三（一八七〇）年一月に起きた中津での暗殺未遂事件は、尊王派が諭吉の帰省を狙ったものである。それは、京都にいた渡辺重石丸が中心となり、当時は配下だった朝吹英二を



途中の大阪まで派遣しながら失敗、帰省後は増田が福沢家まで押し掛けたが服部五郎兵衛がいて失敗、城下南部の下土屋敷街にあった水島家で、六兵衛や増田が大声で謀議をしていたら、隣の中西与太夫に咎められて失敗した、というのである。(註三)

なぜ渡辺らはそうまでして諭吉の命を奪いたかったのか。それは尊王派と諭吉ら実学派が、最初から別の道を歩んでいたからではない。そうではなく、おそらくは同じ真城門下生として、かつては北条時宗や楠正成を礼賛していた仲間だったからなのである。尊王派が実学派を、「皇道の理想にもとる裏切者」となじれば、実学派は尊王派を、「攘夷の直接行動主義はかえって国を危うくする」と反論する。両者の愛国心はともに本心からのものであり、しかも、どこまでも行き違ってしまう。そして決して調停されることはなかったのである。

## 註

(一)『鶯栖園遺稿』は小久保明浩氏によって広く知られるようになった。現在のところ刊行されていない。本稿では小久保氏の元同僚である高橋陽一氏所有の複写版を参照した。

(二)文久三(一八六三)年発信の隈川宗悦・南条公健宛の書簡(一八番・『書簡集』第一巻所収)は、薩英戦争

に対する欧州各国の反応を簡潔にまとめた報告書である。ともに医師である隈川・南条にそうした報告をした理由について、このうち南条は一橋家の侍医であったことから、福沢のこの報告は同年秋に横浜で薩英戦争の戦後処理を周旋していた將軍後見職徳川慶喜に宛てられたものという推測が成り立つ。

(三)『福翁自伝』の「暗殺の心配」の章でわざわざ中西与太夫の名前があげられているのは、自伝が紙上掲載されていた明治三一(一八九八)年当時、中西家の隣の水島家で暗殺の謀議をしていた一味のうち数名が中津で存命であったからであろう。福沢がこの話を後に弟子入りの増田宋太郎から聞いたに相違なく、その時暗殺団の個人名まで聴取していたものと思われる。

## 参考文献(初出年代順)

- 小野精一『野本白岩遺芳』(非売品・大正一二(一九二三)年七月発行)  
赤松文二郎『扇城遺聞』(名著出版・昭和四九(一九七四)年六月復刻・原本昭和七(一九三二)年刊)  
徳川斉昭・阿部正弘『新伊勢物語』(県史編纂幕末維新部会編『茨城県史料』幕末編1・昭和四六(一九七二)年一二月刊)  
小久保明浩『『鶯栖園遺稿』と福沢諭吉の書翰』(福沢諭吉協会編『福沢諭吉年鑑』二六・平成一一(一九九九)年一

二月刊)

小久保明浩『塾の水脈』(武蔵野美術大学出版局・平成一六  
二〇〇四)年四月刊)